

平成25年度研究成果 名古屋都市センター研究成果

平成25年度の研究の概要を紹介します。なお研究報告書は名古屋都市センターのまちづくりライブラリー及びホームページでご覧頂けます。

<http://www.nui.or.jp>

市民研究

研究テーマ 名古屋まち歩き新発見

市民研究員 水野 孝一、粟田 益生、富永 和良
水谷 栄太郎、小宅 一夫
オブザーバー 山田 和正、山田 美紀子

1 はじめに

名古屋には千数百年の歴史を持つ京都や奈良には及ばないものの創建以来1900年続く熱田神宮や、築城以来400年になる名古屋城があるが、それ以外となるとすぐには出てこない。しかし、よく探してみると「知られざる」「忘れられた」「秘めたる」「隠れたる」観光資源がたくさんあることがわかった。そこで、これらを調査発掘し、市民や観光客各位にご紹介することで、老若男女市民のまち歩きや、名古屋には見るものがないなどとお嘆きの観光客へのサービスの一助にしたい本研究を行った。以下、2～5では、調査発掘した事例の中から1件ずつ取り上げて紹介する。

2 「知られざるもの」

今回は15件をリストアップしたが、明治33年製蒸気ポンプ消防車と昭和10年に輸入されたベンツ社製のしご車（いずれも日本に一台）が、守山区にある名古屋市消防学校に保存されている。



右側の赤く塗られているのが蒸気ポンプ消防車

3 「忘れられたもの」

11件を載せているが、これも日本ではただ1台あった霊柩電車とペットの慰霊碑を取り上げてみた。残念ながら霊柩電車は現存せず、また写真も残されていないようだが、当時の記憶をスケッチで残してあった。

4 「秘められたもの」

昔と言っても、大正以降のこと。江戸時代以来中区大須にあった旭遊郭が火事で焼失したため、大正12年(1923)に名古屋駅の西、現中村区大門の北に名古屋最大の遊郭「中村遊郭」が建てられた。その規模は、娼家138軒、娼妓2000人と言われ、劣悪な環境で、病気や虐待で多くの娼妓が薄幸のうちに亡くなった。

昭和の初め、中村観音「瑞龍山白王寺」住職が米野火葬場に放置されたこれら無縁の遺骨を供養するため、仏師を招いて遺灰を固めて、高さ8m、重さ15tの本尊十一面観世音菩薩像をつくった。

5 「隠れたるもの」

戦艦大和の46cm主砲砲弾。現在、中区丸ノ内、護国神社境内に戦艦大和記念碑として置かれている。



主砲の弾丸は、直径46cm、長さ195cm、重さ1460kg、射程は42kmとある。

提言

今回、発見した観光資源を、色々な形で活用していただきたいと思っており、例えば、区役所での転入市民への資料、区単位のルートマップ、まち歩き国際版などが考えられる。

また、未来の街に巨樹、巨木を育てること。現在は歴史的あるいは美術的価値は低くとも将来の名所旧跡となりうるようなものを今から調査保存するような手段を講じたい。特に民俗資料や産業遺産など、手を拱いていけば消えてしまうものを、まず収集保存するような仕組みが必要である。

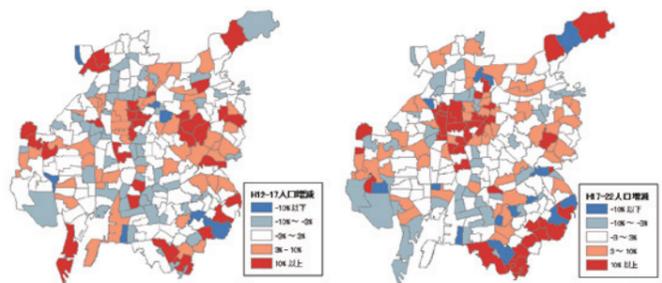
一般研究

研究テーマ 都市における空地の評価と活用に関する研究

名古屋都市センター調査課 福田 篤史

本研究では、都市における空地の増加に焦点をあて、外部不経済の抑制や地域課題の解決等を念頭に置いた、空地の活用の方について提案を行った。

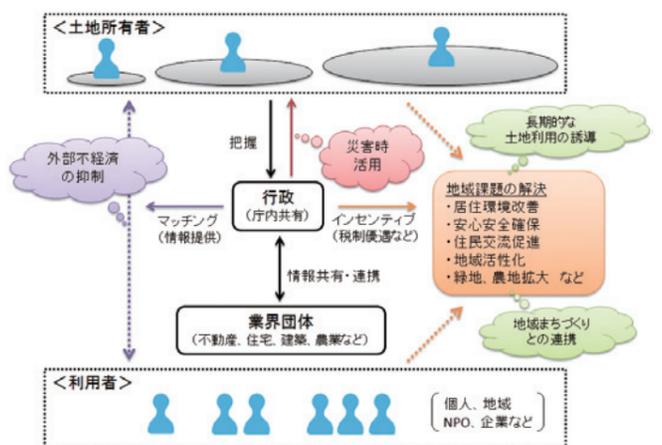
名古屋市の人口動向を見ると、既成市街地を中心に空洞化が進むことが考えられる。また、都市計画マスタープランでは「駅そば生活圏」での都市機能の強化や居住機能の充実を図るとしており、そうした地区以外での低密度化も想定される。



学区別人口の推移（国勢調査結果より作成）

他都市においては、空地の効用や活用ニーズを踏まえつつ、敷地拡大への支援、土地所有者と利用者のマッチング、望ましい活用に対するインセンティブの付与、災害時の活用に向けた仕組みづくりなどに取り組む事例が見られる。

今後の方向性として、個人や地域など各主体におけるニーズ、平時と災害時とのバランスなどを踏まえつつ、以下図で示すような空地の活用促進に向けた枠組みについて考えていく必要がある。



空地の活用促進に向けた枠組み

一般研究

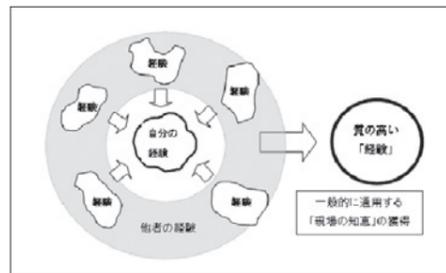
研究テーマ 自治体技術者の知識・技術の継承について

元名古屋都市センター調査課 太田 一徳

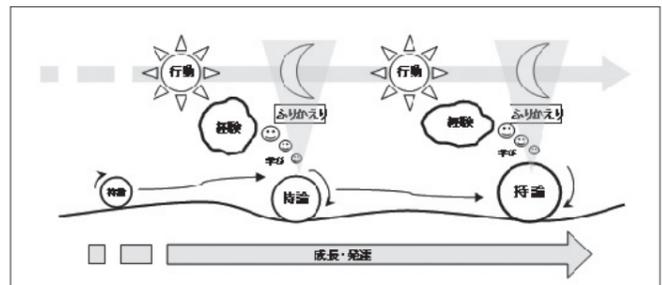
技術者の知識・技術の継承について議論を進めると、必ず「現場」が重要であるという結論に達する。当たり前と言われるかもしれないが、「現場」における「経験」が知識・技術の継承に関係することについては誰もが否定はしないだろう。しかし、それ故に我々は知識・技術の継承や人材の育成を「現場」に任せすぎではないだろうか。

もしかしたら、「結局は現場だね」、「やっぱりOJTでしょ」と言いながら、現場の実情を解明することをせずに、各職場に人材育成を託し、解決すべき課題などを見逃してきたのではないだろうか。更に言えば、「知識・技術の継承が進まない」、「OJTがうまくいかない」という悩みがあるのであれば、今の「現場」主義の人材育成の修正を図っていく必要があるのではないだろうか。

このような問題提起をしたうえで、「技術者が必要と考えるOff-JT」を解明しつつ、「個人の能力形成に必要なポイント」をまとめたうえで、「経験」をキーワードに土木分野の「現場(OJT)」を補完する「Off-JT」の進め方を提案する。



他者の「経験」との融合



個人の能力形成における「成長・発達」のイメージ